

ヨーリス・フフナーヘルにおける自然信仰と宇宙観

— 《レダと白鳥》(1591 年)を中心に—

河村耕平 (東北大学)

本発表は、16 世紀の画家ヨーリス・フフナーヘル(Joris Hoefnagel, 1542-1600)の作品に見出される汎神論的な自然への関心、および同時代の宮廷文化における宇宙観からの影響を論じるものである。

フフナーヘルは、20 代に経験した宗教戦争による破壊および死、そしてそこから再生しようとする社会の中で、細密かつ迫真的な自然描写を確立した。マリサ・バス(2019)は、この画家の自然描写への傾倒の背後には、自然の不変的法則およびそれに基づく様態の変化・適応に、人間存在の運命を重ねる思考があったと指摘する。一方、パメラ・スミス(2004)によれば、腐敗物や死体から発生するという昆虫に対する同時代的な認識から、フフナーヘルが昆虫を再生の象徴として捉えていた可能性がある。このような先行研究を踏まえると、フフナーヘルの描く自然物における、生命の循環的規則という視点には検討の余地がある。

フフナーヘルによる『四大元素』「火」(1575)における巣にかかったハエを狙うクモ(フォルリオ 47)、あるいは《髑髏を持つプット》(1598)の萎れたバラは、自然物の死を忠実に捉えると共に、人間の死に対する画家の関心を窺わせる。また、この画家の作品には、同時代の医師パラケルススがヨハネの福音書(12:24)を引用しつつ提起した、腐敗からの生命の再生という循環構造とよく似た視覚的描写が見られる。例えば、《強欲と野心の戦いの寓意》(1571)やアルバム・アミコルム(友人らと共有した一種の画帳)における遺骸から芽生える麦の穂は、生命の再生に対する画家の意識が表されている。

このような自然観は、のちにフフナーヘルが描いた、神話に由来する物語場面の周囲に多様な自然物を配置した一連の作品(いずれも縦横約 20 cmの小さな媒体である)にも見られる。周辺部に描かれた自然物においては、枯れて腐りゆく植物や捕食される寸前の昆虫と、羽化して成虫となる幼虫や開花する蕾が対置され、死と再生の循環という自然の原理が暗示されている。そして中心にある物語場面、たとえば《ウェヌスとクピド》(1590-91)における美と愛への警句および「自然の事物における四つの元素」という銘文、《髑髏を持つプット》における死への観想のイメージは、それぞれ、周囲に配された自然物への視覚的註釈と解釈することができる。中でも、《レダと白鳥》における愛と性の場面や生命を育む卵は、生命の誕生を象徴的に示している。

こうした観者の両掌に収まるほどの小さな媒体を通して、本来広大な自然の循環を視覚化しようとする意図は、プラハ宮廷や同時代における人文主義的実践の背景にあった、大宇宙と小宇宙の照応関係をめぐる新プラトン主義的な自然観とも通じている。フフナーヘルによる一連の自然描写は、自らが経験した現実世界の破壊とそこからの再生、詳細な観察によって再現される自然の循環的構造、そして大小宇宙の照応という哲学的自然観をいわば同心円状に重ね合わせた意欲的な実験的試みであったと考えうる。